“BACK TO THE WILD” （野生に帰る）： ゾウの保護センター物語 (サポート映像付き)

私は、絶滅の危機に瀕したアジアゾウとその中で暮らすコミュニティが直面する課題を紹介した上で、当センターのビジョンと、ここゾウ保護センターで実施されているさまざまなミッションについて説明します。

20世紀初頭には、ペルシャ湾からインド、中国にかけて、10万頭以上のアジアゾウが生息していた可能性があります。しかし、この3世代でその数は少なくとも50%減少しています。

アジアゾウの生息地は、過去に生息していた地域のわずか15%にまで減少し、世界の人口の大部分がその周辺に住んでいます。生息地の喪失、分断、密猟や生きた象の取引による圧力は、この巨大な遊牧民にますます大きな脅威を与えています。

ラオスは、アジアゾウがまだ生息している13カ国のうちの1つです。世界のアジアゾウの個体数は4万から5万頭で、そのうち飼育されているゾウは1万5000頭、野生のゾウは2万5000から3万5000頭です。アジアゾウは大陸に生息する最大の陸生哺乳類です。アジアゾウは、熱帯の生態系を維持するために重要な役割を果たす「キーストーン種」です。「森の庭師」とも呼ばれ、国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストで「絶滅危惧種」に指定されています。また、アジアの多くの文化圏では神聖な動物として扱われ、半神として崇拝されています。しかし、逆説的に言えば、これらの神々はしばしば鎖につながれているのです！

ラオスの野生および飼育下のアジアゾウに対する脅威

ゾウの個体数は、それぞれの国で特有の脅威にさらされています。かつて「100万頭のゾウの国」と呼ばれたラオスでは、野生ゾウは主に森林伐採による生息地の喪失によって脅かされていますが、その程度は低くても密猟によっても脅かされています。

森林伐採により、野生ゾウの生息地は分断されています。野生のゾウの移動パターンが損なわれています。個体群は孤立し、近親交配の危険性があります。人間とゾウが対立する可能性も高くなります。

このように、ラオスのゾウの将来は非常に心配な状況になっています。

ラオスには、比較的大きな野生のゾウの集団が2つあります。ひとつはラオスの中央部、ナカイ・ナムセウン国立公園内。もうひとつは、北西部のサイニャブリー県にあるナム・プーイ国立公園である。ラオスの野生のゾウは300頭以下、飼育されているゾウも同程度というのが一般的な見方です。

ECCは、ラオスの「ゾウの養殖場(nursery)」になることを使命としています。そのために、繁殖技術の向上には資源も努力も惜しみません。ラオスでは繁殖可能なメスがほとんどいないため、赤ちゃんを産まなければならないというプレッシャーがあります。そのため、私たちは伝統的なマフーの知識とハイテクなホルモン分析を融合させた方法を開発しました。

私たちの使命

私たちの使命は、土着の伝統的なマフーの知識と知恵を現代科学と融合させ、ゾウの救出、リハビリテーション、再生産、再繁殖、野生復帰を実現することです。

私たちの日々の活動は、ゾウの自然な生活のパターンに従っています。ゾウは生まれ、餌を食べ、肉体的にも精神的にも病気になり、繁殖し、生き、そして死んでいく。ゾウは母系の群れで生活する高度に社会的な動物です。

ECCでは、ゾウの生活のあらゆる段階に立ち会い、効率的に活動することで、ゾウが野生で経験するのとできるだけ近い環境で、最良の食事、ケア、社会的ダイナミクスを提供することを目的としています。

ECCで飼育されているゾウは、通常、違法な人身売買から救出されたり、飼育ができなくなった飼い主から購入されたりしています。その後、ECCにあるゾウの病院に運ばれ、応急処置や必要に応じて獣医師の治療を受けることになります。

ECCでの獣医療は最高水準にあります。また、国際的に著名な獣医師やタイのチェンマイ大学獣医学部と連携し、地域でもトップクラスのインフラを整えています。治療が終わったゾウは、森の中で新しいマフーと親密な関係を築く期間を過ごします。マフーとゾウは、マフーがゾウを完全に扱えるようになるまで一緒に過ごします。

ゾウが心理的なトラウマを抱えている場合は、専用のエリアで感覚的なエンリッチメントを提供します。ゲームやパズルに挑戦し、その中に食べ物を隠したりします。こうすることで、新しい環境や世話人に適応する時間を与えながら、ゾウを活動的にさせることができます。

ゾウは1日の大半を、ECCが設置されているナムティエン地方保護区で栽培された自然食で過ごします。また、獣医師やマフーが現地で栽培・調理した補助食も楽しんでいます。

リハビリテーションと適応の期間を経て、ラオスのマフーと私たちの行動生物学チームが考案したプロトコルに従って、他のゾウと会うようになります。

社会化と繁殖のための初期作業のほとんどは、経験豊富なラオスのマフーが担当します。どのゾウとペアを組むか、どのような社会的関係を作るかをアドバイスしてくれるのです。また、ゾウが互いに惹かれたり反発したりすることもアドバイスしてくれます。ゾウの行動に関する彼らの知識は卓越しているため、私たちは常に彼らのアドバイスを重視し、それに従っています。

マフーからゾウのグループやペアが提案されると、生物学チームはゾウの行動を調査し、糞便と血液のサンプルを採取して内分泌学研究所で分析します。生殖と社会化のために必要な情報を提供する3つのホルモンを研究するためです。

リワイルディング

また、リワイルディングのプロセスはいくつかのステップを踏んでいます。

まず、ゾウはナムプーイ国立公園まで歩かされます。元飼い主となる人たちが近くにキャンプを張り、毎日巡回して放野されたゾウの行動や健康状態をチェックします。

2～3ヵ月後、マフーは週に1度だけゾウを訪ね、足跡や糞の跡、森の中の痕跡、竹鈴の音な

どを頼りに、ゾウの行動を観察します。この間、象が人間の住む地域に戻ろうとして、人間とゾウの衝突を引き起こす危険性がないことを確認することが目的です。また、彼らの移動ルートや行動範囲の変遷を観察・記録します。

集団の結束が固く、栄養不良や社会不安の兆候がなければ、無線GPS首輪を装着し、「ソフトリリース」のプロセスは終了したとみなされます。これで、ゾウたちは自由に歩き回ることができるようになったのです。

最後のステップは、ラオス当局が彼らの「野生状態」を公式に認め、レンジャーによるパトロールで彼らの住処を保護することです。このパトロール隊もECCが訓練し、資金を提供し、一部管理しています。

現在、私たちの活動の中で、野生のゾウや放されたゾウとその生息地の保護を支援することが増えてきています。ECCは現在、ラオスで2番目に大きな野生のゾウの群れが生息するナムプイ国立公園で、レンジャーによるパトロールを担当しています。ラオス初のレンジャー・アカデミーの設立を目指しながら、2つのレンジャー・チームの訓練、装備、管理を行なっています。放し飼いのゾウと野生のゾウにGPSの首輪を取り付け、これらの個体群をよりよく監視し、人里に近づき過ぎないようにするためです。

保全のための教育・科学

また、「キッズ・イン・コンサベーション」プログラムの一環として、ラオスの学生や小学生をセンターに迎えていることも、私たちの活動の重要な一部となっています。このとき、子どもたちは教育用の教材を無料で配布され、私たちのすべてのステーションに案内されて、ゾウの生態や社会生活、保全の課題などを観察し、学ぶことができます。

また、アメリカのスミソニアン協会やフランスの研究開発機構などの国際機関や、最近ではラオス国立大学の獣医学部で初の野生生物学講座を開設するなど、さまざまな科学研究プログラムも実施しています。私たちの研究分野は、寄生虫学、病気、内分泌学、生殖衛生、社会動態を中心に展開されています。